

教育

一般社団法人 現代教育研究協会

会 報

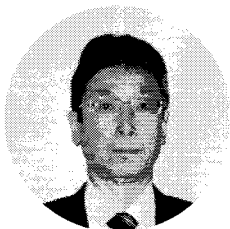
52

題字 榎本頼兼氏
(平成 8 年～平成 20 年 京都市長)

発行所
一般社団法人 現代教育研究協会
〒600-8216
京都市下京区不門通七条下ル
東塩小路町 709
TEL (075) 371-5081
印刷所 株式会社 洛 陽

現代教育研究協会の現状と課題、役割

会 長 梶 村 健 二



日頃は
現代教育
研究協会
の活動に
様々な形
でご協力
いただい
ています

ことに深く感謝申し上げます。

現代教育研究協会は、一九七四年(昭和四十九)年発足以来、四十三年が経過しました。現在会員数約七十名を数えており、毎年新たな会員にもご加入いただき、着実な歩みが続けてまいりました。

これまで年四回の講演会そして春の一泊研修と、秋の日帰り研修会を実施してきました。しかし、会員の高齢化に伴い各種行事の参加者数も少し減少傾向にあるのが実態です。

こうした中、春の一泊研修については楽しみにしていただいている会員も多くおられますが、日程調整や参加者減少による参加経費の負担増などから今年度から実施を見合わせざるを得なくなりました。秋の日帰り研修会と統合してできるだけ多くの会員にご参加いただける日程や魅力的な内容等を

考えながら実施していきたいと計画しています。

会員の生の声を野里先生に書いていただいています。現在お仕事中の方も、また少しゆとりさされている方、あるいは時間に余裕のある方、いろいろな方のニーズに合った学習内容にしていければと思っています。

協会の研修会で聞いたことが明日からの仕事や生活に何らかの形でつながっていくようなものになればありがたいと考えています。ただ、すぐには実生活につながらなくても、そのことが心の糧

となり、これからの生活が豊かになっていくような内容のものを提供できればいいのではないかとともに思います。

以前、藤野先生からアサギマダラとフジバカマの話をお聞きしてから、毎年庭にアサギマダラが来るのを楽しみにして、その写真をご自身のお寺のお知らせ通信に掲載されている会員の方もおられます。

また、今年の一月の例会で京都新聞写真部の山本陽平記者から新聞掲載の写真を見せていただきながらお話を伺いましたが、その後新聞を見るたびに記者の名前を確認し、山本記者の名前がある写真を見ると写真の背景にある思いも考えながら見るようになった自分がいるようになりました。

多くの会員の方が講演会での経験を様々な形でそれぞれの日常の中に生かしていただいていることと思いますが、これからもこうしたことなどを常に念頭に置きながら会の運営に努めてまいります。

ノーベル医学生理学賞受賞

「オートファジー」の研究で二〇一六年ノーベル医学生理学賞を受賞された大隅良典・東京工業大学栄誉教授が、昨年十二月七日ストックホルムで記念講演をされた新聞記事にこんなことが書かれていました。

「科学に有益性だけを求めるのではなく、社会は基礎科学を一つの文化と考えてほしい」

受賞理由となった細胞のオートファジー(自食作用)の研究を「役に立つとは思わなかった。でもそういうことが後で有益だとわかるのは、科学の歴史ではよくあることである」

「自分が重要だと思いうことにチャレンジすることが大事で、若い人が基本的な疑問に挑戦できる環境整備が必要だ」基礎研究の重要性については(ノーベル賞に選ばれたという事実だけで、一つのことを語ってくれていると思う)と述べておられます。

科学の世界だけでなく様々な生活の場面においても、有益性も大事ですが、基礎的・基本的な視点をしっかりと持つ営みも大事ではないかと思っています。

次期学習指導要領

文部科学省は二月十四日、約十年ぶりに改訂する小中学校の学習指導要領案を公表しました。

学習内容は減らさず、現行指導要領の「脱・ゆとり」路線を継承して、「質と量の両立を図る」ということが言われています。

授業の改善で、いわゆるアクティブラーニングの「主体的・対話的で深い学び」を実現し、思考力や主体性を伸ばす教育が図られます。

小学校は二〇二〇年度、中学校は二一年度から実施されることとなります。「どのように学ぶか」「どんな資質・能力が身につくか」にまで踏み込み、各教科の指導上の

目標を記述したとのことですが、新聞などで特に注目されているのは、英語に親しむ活動の開始を小学三年に早め、小五からは英語を正式教科とするということです。今後指導の質を高めることと、授業時間の確保が課題になってくるとしています。

今回の学習指導要領の改訂で、学びが楽しいと感じること、関心や疑問を持ったことに自ら行動できること、仲間と意見交流ができること、道筋を立てて考え、根拠を示して伝えられること、などこれらを目指した授業づくりがこれからの学びのスタイルに求められるといわれています。ぜひこうした流れが定着して様々な面で自分の関心や疑問に積極的に挑戦していく若い人たちが多く生まれていくことを願っています。

おわりに

今年も多くの方の皆様に喜ばれる講演会など、充実した活動を目指してまいりたいと考えています。

これまで参加していただいている会員はもちろんのこと、たまに顔出ししてくださる方も、またこれまでほとんど出席されていない方もどんどん参加してください。

「一見旧知のごとし」です。すぐに豊かなふれあい、交流が生まれます。一人でも多くの皆様の参加を心からお待ちしています。

第一回講演会 平成二十八年五月十四日(土)

外国人教育者が気づいた点

京都市立西京高等学校教諭
コンダイア・クリシユナ氏



平成二十八年年度最初の講演会
は、コンダイア・クリシユナさん
をお迎えしました。

クリシユナさんは一九六一年に
インドで生まれ、マドラス大学
を卒業、一九八四年に京都市教育
委員会にALT(外国語指導助手)
として赴任されました。

以後研鑽を重ねられ、京都市教
育委員会から教育功労者表彰を受
け、バーミングハム大学の英語教
授法・修士課程を卒業、二〇〇四
年に京都市立高等学校英語科教員
として正式採用され、今日に至っ

ておられます。

今回「外国人教育者が気づいた
点」と題した講演をしていただき
ました。

インドと日本という国の習慣や
価値観の違い等々、今まで日本
で過ごされてきた中で気付かれた
様々な事について有益なお話を時
間いっぱいしていただきました。

先生の意にそぐわない点もある
かと思いますが、講演の概要を報
告させていただきます。

はじめに

日本語を学校でちゃんと学んだ
ことはなく全く独学なので、ぎく
しゃくするところがあると思います
が、どうかよろしく願います。

三十年間、京都市の主に高等学
校の現場で英語教育に関わってき
て、今は西京高校の英語科教諭、
テニス部顧問として働いています。

三十年間の経験を通して、自分
の眼に光ってきたものをお話し
たいと思います。子どもが大人に
なっていくまで、どういった教育
を受けることが望ましいのか、社
会に貢献し、正しい知性をもち世
の中を平和にしていくには、と毎

日考えます。

現実の社会では、人間の人間に
対する問題というものが続してい
ます。テロ、経済危機、気象変動、
新しい種類の病気など問題が拡大
しています。

問題が拡大する世の中での教育
はどうあるべきか、人間は世俗的
な欲求、要望を静めることが出来
ずに深いところで揺れ動き、混乱
していると考えてしまっています。

そういう中で日本の教育シス
テムには、知性を高めるなど他国
の教育の狙いと同一のものもありま
すが、日本独特なものがあります。

外国が真似ができないと思うもの
であり、今日はそういった所を話
させていただきます。あくまでも
私個人の意見、考えです。

外国人が日本で暮らしていく時
はわからないことばかりで、不安
に感じることが大変多いです。日
本人にとっては常識で当たり前の
ことが、外国人にとっては非常に
わかりにくい点があり、それらが
わかるようになると、それらは大
きな美德であることに気付いてき
ます。

そういう日本人が持つ美德のこ
とを私は宝石といっているのです
が、三つあります。三つとは、①沈
黙 ②清潔さ ③謙虚です。この
三つは極めて日本的なものであり、
他の国の常識とは異なっています。

外国人が日本に来た時、日本人
が外国に住んでみた時、外国と
日本と全然違うことに気付くこと
と思います。日本の子どもたちは

小さいころからこの三つの宝石を
徐々に身につけていきます。

宝石1、「沈黙」

初めて日本で授業をした時、生
徒がなんと静かで反応がない、非
友好的で冷たいとまで思いました。
沈黙して黙っていると何を求めて
いるのか、何を求めているのか全
然わかりません。しかしその裏に、
「聴く」という素晴らしいものが隠
れている。この美德に気付くのに
長い年月がかかりました。

外国にも沈黙は金ということわ
ざがありますが、それは自分の口
を閉じて、自分の考えは言わず相
手の言葉に耳を傾けなさいという
意味です。そのことが必要な時の
言葉であり、日本における習慣と
しての沈黙の行動とは意味が違い
ます。子どもがじっと座って教師
の話の黙って聞くなどは外国では
考えられないことです。

何を聞いているかという、話
の内容だけでなく話し手の意図を
聞いている。このことが外国と日
本では全然違う。人が何をしたい
と思っているのか、話し手の意図
まで理解し適切に反応するという
聞き手の素晴らしい素質を思います。

インドにも沈黙はありますが、
宗教的なものであり「冥想」とで
もいうものです。日本での習慣化
された沈黙は話し手と聞き手の心
の交流を支えています。以心伝心
という素晴らしい美德です。実際
の世の中でそれをどう生かしてい
くかは別の話になりますが、教育

現場では子どもたちに沈黙という美德を養っていると思います。

宝石2、「清潔さ」

人間は誰も身の周りが清潔であるのはいいことと思つていますが、日本の場合はその程度が全然違います。学校現場では小さな小学一年生から掃除をしています。私が驚いたのはトイレ掃除です。今はもう平気でやっていますが、日本へ来たとき、家のトイレの掃除をするなんて考えられなかったことです。

日本の学校では教室、トイレ、廊下、階段など自分達が使つているところは自分達で掃除し清潔にするというセンス、英語でいうとシビックスセンスを育てている。社会全体が住みやすくなる簡単だが力強いことです。

西京高校にはたくさん外国人が来ますがまず最初に驚くのは玄関でスリッパに履き替えることです。

(……)のあと、日本の教育や習慣の中のいろいろな掃除、清潔さの例をあげられ注意深さや思いやり、礼儀正しさの育成につながるという話が続く……)

宝石3、「謙虚さ」

どの国においても謙虚さは美德であるが、個人に任されています。教育で育成するものではありません。日本では言語の中に入っている。挨拶するとか礼、お辞儀ですね。日本人はしょっちゅう謝つて

いる。すみません、御苦労さま、お疲れ様、よろしく願ひします、などという言葉を持たない日本人というのは考えられない。

そういう日本人が外国に行くと言葉が通じないので困るだろうと思う。日本人はそういう謙虚さを表す数々の言葉の中で暮らしている、日本の中の平和を保つひとつの柱になっていると思う。謙虚さというのが秩序を保つ役割をしている。

(……)のあと、日本の静けさ、電車の整列乗車、列車の時刻に対する日本とインドの考え方の違いなどに話はつづく……)

これらの三つの美德が日本の常識の基礎であると私は思います。

宝石の持つ課題

宝石には硬い、冷たいという欠点もあります。沈黙、清潔さ、謙虚さについても欠点といえる部分、社会の変化に伴う子供たちの変化の部分など、課題になっている部分があると思います。

沈黙でいえば、何のために沈黙しているのか？ 本当の気持ちを隠しているのかもしれない。清潔さでいえば、きれいでないものをどうみるのか？ きれいなものしか認めないのか。謙虚さについては表面はそうであっても内実はちがうのでないか、ものには程度があるので、外国では通じず、誤解されるのでは？

(……)様々な事例をあげてのお話が続く……)

まとめに

人間の本质は何かというと、心の奥深くにある静寂さというところにあると思います。それはGNPが提供する快適さよりもっと上位にあるものです。英語でいえばイン

テリジェンス、ウィズダムといったものです。そういったものに教育というものは近付いていかねばと思います。

今日私が話した三つの美德を持つていけば、宗教というものは

不要ではないかとさえ思います。

……こうして先生の話は最後に人間の本质は何かと深く広がっていき、参加者の盛大な拍手の中で講演を終えられました。

第二回講演会

平成二十八年七月九日(土)

日本の誇り 漆の文化

株式会社 さわの道玄 取締役会長

澤野道玄氏

協会の活動の柱の一つに、我が国の伝統文化、産業の継承、育成に資するをあげており、今年度の第二回講演会は株式会社「さわの道玄」取締役会長である、澤野道玄氏より「日本の誇り 漆の文化」と題したご講演をしていただきました。

澤野道玄氏は我が国の歴史的建造物や美術工芸品などの貴重な財産を後世に伝えるため、伝統的な技術と新たな技術の両方を用いて、文化財の保存修復に取り組んでおられます。

多様な技と知識を持った職人が集まり、漆塗り、彩色、剥落止めなどの複数の工程を一社で請け負う、修復の業界の中で希少な存在として成長を遂げておられます。

枚挙に暇のないほどの全国の国宝や重要文化財、祇園祭の山鉾などの修復や修理、保存などに多くの実績をあげられている澤野氏より日本の誇りである、漆の文化についてのお話をいただきました。

映像や資料を駆使した氏のお話をすべてお伝えすることはとても出来ませんので、先生の意を尽くしていない点も多いと思いますが、

はじめに

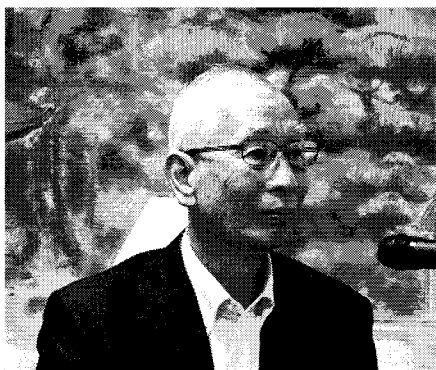
ご講演の冒頭の部分を中心にその概略を紹介させていただきます。

私が漆に関わり始めて五十年たちます。まず最初に、漆とは何か？ 漆の原点をわかりやすく紹介した映像があります。ご覧ください。(……)日本に僅かに残る漆の産地、岩手県二戸市の浄法寺町で働く漆職人の活動、木の育成から始まり、一年間の採取後伐採する殺し掻き法、漆掻き作業を順に追った映像、国内に数人しかつくる人のいない漆掻き道具の説明、漆掻きの作業風景、半年で一本の木から採れる漆は牛乳瓶一本、採れる時期による漆の品質の違い、漆の品評会の様子、等々の映像が映し出される……)

漆とは

一般的に塗料は石油から作りますが、漆の塗料は木が作ります。石油製品と天然の樹脂というものは全く違うわけです。ですから漆を塗料に使うことは環境的にも人間の体にも良いと思います。

韓国では食器類に石油系の塗料を塗って販売すると罰則があり、食器は金属か漆塗りが基本とな



ります。ところが日本はそういうルールにはなっていない。

人間が管理して育ててきた樹木には、漆・栗・柿・桑があります。桑の木は新しいですが、漆・栗・柿は縄文時代から管理して育ててきました。必要欠くべからずだったのででしょう。

漆掻きの映像をみて貰いましたが、漆掻きの仕事は大体半年しか働かず、年収は二百万円位になります。それだけで生活するのは難しく冬の間は副業を持って生計をたてます。

私たちが何か副業をつくってあげないと、というところですが、ちょうど本年平成二十八年から文化庁から日本の文化財に塗る漆は国産の漆にせよとお達しがありましたので、漆掻きの皆さんの生活の保障が多少出来たという状況にあります。

国産漆の八十%は先ほどの映像の岩手県浄法寺地域で生産されていますが、掻き子と呼ばれる漆掻き職人は二十名ほどおられます。もともと漆が採れる場所ですら二十名の掻き子でうち九名が六十歳以上です。若い掻き子さんを真剣に育てていく必要があります。

漆の木は育てるのも風水害や動植物の害などで簡単ではなく、漆が採れるまで育つのに十五年から二十年かかります。京都府では夜久野で漆を採っていますが、年に二キログラム、牛乳瓶十本ぐらいしか採れません。

何とか国産漆を復活させたいと

思っているのですが、国産漆の生産量というのは、明治二十年で七百八十二トン、平成五年は五トン、近年では一トン台という悲惨な状態です。

天然の漆は有害物質を含んでおらず、塗りや廃棄の時も害を出すことのない、環境にやさしい未来の塗料です。我々は漆を塗るだけでなく、漆を確保していくことが業界全体で国産漆の現状を何とかしていきたいと思っています。

漆の語源は何か

漆には「うるわしい」という言葉から始まったなどいろいろな語源説があり、縄文時代から漆を塗っているので縄文語だということもあります。

「うる」というのはうるうるというように液状を意味し、液状が乾燥し固形化することを「し」と表現するというのが今最も言われているようなことです。

ジャパンとは

英和辞典でジャパンとひくと漆器が出てきて、チャイナとひくと陶磁器がでます。

日本を代表する塗り物ということだと思いますが、英国の辞典では黒で塗って金で加飾したものと書いてあります。そういう漆器類を西洋では喜んで使っていたということが伺えます。

マルコポーロが東方見聞録という書物で日本を紹介しています。が、実際に日本に來たわけではなく、

中国で日本の蒔絵を見て金細工と思い日本を黄金の国であると紹介しました。

それを知ったコロンブス等の多くの探検家がポルトガルやスペインから黄金の国を目指して探検に出てアメリカ大陸や東インド諸島の発見につながった経緯があります。

料理では

韓国料理にサムゲタンというのがありますが、韓国の鳥肉屋には漆の枝や皮が置いてあり、一緒に煮込むとサムゲタンが美味しくなるといわれています。又内蔵関係の悪性の病気の特効薬と韓国では広く伝わっていると聞いています。

日本ではそういう分野に未だ取り組んでいないが、韓国では蜂蜜に漆を入れたものなどが販売されています。

日本ではお国柄の違いという

か、漆は怖いものという固定観念があるのかなと思います。

台湾でも漆の青い葉を煮込むと良いお茶になるといわれ、日本では木曽の平沢というところの道の駅で漆の実で煎じた珈琲まがいのものが飲めます。

漆の源流

若狭の三方五湖のあたりに鳥浜貝塚という縄文時代の遺跡がありますが、そこから漆の木がたくさん出土しています。一万一千年前です。

縄文時代の草創期に何本も漆の木を植えていた、栽培していたという痕跡があります。北海道の函館の近くの垣ノ島遺跡では九千七十年前の漆を塗料として塗った繊維製品、麻の衣服が出土しています。麻の糸に漆を塗ってから織り始めたということですが、

これが世界で最古の漆の考古品となります。

中国の方が古いと思われるのが七千年前の遺跡から出土した漆塗りの木椀です。ところで、北海道には漆の木は一本もありません、漆の木の北限は青森県です。北海道は寒いところなので本州で漆の衣服を手に入れて北海道に渡ったと考えられます。縄文時代にもそういった交易があったということです。

(……このあたりから、澤野氏のお話はますます佳境に入ってきますが、紙数に限りがありご紹介できません。)

講演の最後に、日本産の漆を今後より一層発展させてゆきたいという強い思いを述べられて参加者一同から盛大な拍手が送られお話を終えられました。

第三回講演会

平成二十八年八月二十八日(日)

京都盆地から

自然への付き合い方を考えよう

総合地球環境学研究所名誉教授

福 嶋 義 宏 氏

森林に降った雨はどうなるのか。この疑問は、森林水文学の主要テーマであると同時に、地球

環境の変動が人を含んだ生態系に及ぼす影響を評価、予測していくための重要な鍵といわれています。

第三回講演会は、一般にはまだ言葉としてはよく知られていない森林水文学の権威で、昨年水文学・水資源学に関わる長年の研究調査及び出版文化活動に対して学会功績賞を受賞された福嶋義宏先生から、「京都盆地から自然への付き合い方を考えよう」と題した講演をしていただきました。

先生は、山地小流域における森林の役割について、はげ山と緑化後の違いを長期にわたる観測と、流出モデルによる定量評価の両面から明らかにし、森林水文学の基

礎を構築され、水文・水資源学の社会的認識を高めることに多大な貢献をされました。

第一回の生態学琵琶湖賞、第六十二回の毎日出版文化賞を受賞されています。

講演では、写真や資料をパワーポイントで映像として映しながら、京都盆地から始めて、快適な環境には絶えず人の関与が欠かせないという事例を中心にお話いただきました。大変興味深いお話の連続で参加者は最後まで真剣に聞き入りました。

(……紙数の関係ですべてはともご紹介できませんので、お話の最初の部分をご紹介します。)

森林水文学とは

森林水文学という紹介をいただきましたが、私が大学で育ったのは、砂防学という土砂災害をどう防ぐか? というものでした。そこに水がどう関与しているのか? 水の動きをもっとみてみよう、森林と水の関係もきちんとみないといけない、東山も愛宕山も今は



森林で覆われていますが、昔からずっとそうであつたわけではない、森林がどういう役割を果たしているかというところを中心にと研究をしないといけないということで、森林水文学に特化した研究を京都で始めました。

先達は東京大学に森林総合研究所がすでにありましたが、他に森林水文学をやっているところはあまりありませんでした。

私自身は山登りをやりたくて京都の大学に入ったので、山登り第一、学問第二と割合気楽に研究を続けてきました。大先輩に今西錦司さんがおられ一緒の山小屋に泊まり時田和男さん、中尾佐助さんなどからいろいろと教えるを請いました。

山をやっている一番良かったのは「現場を積む」ということを教えてもらったことです。海外のことを知るには海外のその現場に行つて調査することが一番大事だということをお教えられました。

文献をいくら勉強しても新しいものがすぐに出てくるので自分の発想がなかなか出てこない。それに比べフィールドは宝の宝庫で、本が教えてくれるより多くのものを教えてくれます。

滋賀県の湖南アルプスは遠足で行つたりするでしょう。昔は水泳をするという琵琶湖へ行くか、木津川に行つたものです。今木津川は細かい砂が殆んどなくて大きな石ころがごろごろしています。時代は随分変わったと思います。

京都盆地から考える

さて、京都盆地といいますが、学校教育では盆地は地理学の一部門として中学校くらいまでは教えられていたのではないかと思います。しかし、盆地がどうして出来るのかについては、殆んど教えられていません。

地理学という盆地と山地、これをどういうふうにかけるか、今日は盆地の話ですが、盆地を中心にした周辺の話と捉えてください。

本日の話題の意図は地理学用語として盆地は教えられるが、地形学や治水学、プレートテクトニクス、文化や歴史にもつながるといふ話です。京都盆地から話し始めて中国の雲南まで広げます。

京都盆地とは何か?

盆地とは何か? 盆地の定義をどうするかというと、三方向が山で遮られていて最下流が狭窄部になっているか、氾濫原になっているかですが、京都盆地はどちらだと思われませんか?

全国にある小京都と呼ばれる地域と違って、京都盆地は何故百万人を上回るような人口を養えるようなものになったのか?

これは当たり前と思われるかも知れませんが、大阪や名古屋、東京と比べたら京都は全然違います。

歴史をたどって考えると古代日本は大阪の摂津から奈良の方へ行つて、飛鳥という奈良の南から徐々に北上つて行つて、八世紀末に桓武天皇が京都に遷都しました。

京都遷都以前は短期間に都が各地を移動したが、京都に決まっただけからは明治になるまで続きます。

大阪、名古屋、東京は、もとは大湿地でありとても人の住める場所ではなく、家康が秀吉から江戸に移れと言われた時は葦の原という大湿原の場所でした。

家康が一番にやったことは、葦の原にあるたまった水を出来るだけ早く排水することと河川の付け替え、利根川を分離して今の霞ヶ浦から銚子の方に付け替えさせた。徐々にそれらをやつていつて関東平野になっていったわけです。

しかし平成二十七年九月には利根川水系の鬼怒川の氾濫がありました。京都の鴨川の河床は周辺より低いのであのような氾濫はここ当面は考えにくいですが、それが関東平野では起こるし名古屋でも同じことです。

大阪はどうかというと、男山と山崎の間が狭窄部になっています。だからその上流には土砂がたくさん堆積します。堆積する原因は琵琶湖です。

琵琶湖が何故出来たかというところ、東の方からプレートテクトニクスで地球の厚さ百キロぐらいの表層がずつと動いていて、それが地震や火山の原因になるのです。

プレートテクトニクスとは

私の高校時代には世界ではすでに言われていたが、プレートテクトニクスは日本の教科書には載っていませんでした。

どこがあつたという間に太平洋プレート、フィリピンプレート、地震の原因もプレートの陥入する境目で多く起こっていて、マグニチュードを測ると大体そういうところ起こる。

これは日本人の発想ではなく、こういうことではないかというのとはごくごく初歩的な事で、大西洋とアフリカ、アメリカ大陸をずっとみていて、これは一緒にしたらくつつくんじゃいかと考えた人がいた。

これは地質学の専門家が考え始めたのではなく、動物や植物の生態学の専門家が思い始めたわけですね。琵琶湖の説明でも東南方向から押されて西の方へ移動してきて現在の琵琶湖が出来ていると考えられています。

……こうして先生のお話は日本や世界各地の多くの写真を見ながら佳境に入つてゆきます。荒廃した山地とその復旧事業、はげ山と植林地の雨の流量、川の土砂が上流から下流に行かないようにするための工夫、京都盆地を守ることに鴨川を守ることは同じこと、排水能力を越えるような鴨川中州の樹木繁茂は伐採しなければならぬ、等々続いてゆきます。

講演の最後には参加者から盛大な拍手が送られ、京都に住みながら京都について知らなかった大切なことを教えられたという声が聞かれました。

第四回講演会

平成二十九年二月二十八日(土)

こんなん撮ってます

京都新聞社 編集局写真部記者

山 本 陽 平 氏



年が明けて平成二十九年を迎えた第四回の講演会は、京都新聞社編集局写真部記者の山本陽平さんから、「こんなん撮ってます」と題した講演をしていただきました。京都新聞という京都、滋賀に根ざした地方紙の写真部記者とはどういう仕事をしているのか、何故、新聞記者という道を選んだのか、入社以来今日に至るまで、新聞の紙面を飾ったご自身が撮影した写真の数々、事件・事故の写真的写真、また自然や環境に焦点

を当てた写真、記事などをスクリーンに映しながらたつぷりと紹介していただきました。写真の一枚一枚を見ながらのお話でしたので、会報のこういう形での講演内容の紹介には無理な部分、限界がありますが、お話の雰囲気をお伝えできればということで講演の最初の方を中心に概要の報告をさせていただきます。

はじめに

まず、京都新聞を簡単に紹介させていただきますと、京都府と滋賀県で起きた出来事の取材を基本的にしています。

ここに今朝の朝刊を持ってきていますが、一面にある明治神宮の写真や記事のように京都、滋賀以外の全国の出来ごとや海外の記事については、共同通信からの配信を受けています。発行部数は朝刊が45万部、夕刊が20万部、京都市内のシェアは50%ぐらい、従業員は四百三十人位です。

写真記者の仕事とは

私は二〇〇二年に入社して十五年になります。職場風景をみてく

ださい(事務機が並ぶ)。現場で撮影した写真を時間があるときは持ち帰り、ここでPCに保存して、写真を選び、色や明るさなどを調整して出稿するという流れでやっています。

入社した当時は写真部は二十人位だったのが今はその半分ぐらいの人数で動いています。

使っている写真機材ですが、今ではもう完全にデジタルです。広角や望遠、ズームやマクロレンズを使い分けています。

入社当時は一台がフィルムカメラ、もう一台がデジタルと二台使っていました。

スポーツの取材

取材風景の写真ですが、夏の高校野球の取材です。これぐらいの望遠レンズを使うと球場の後ろの方からバッターとかをテレビでよく見られるような近寄った写真が撮れます。

決勝は一試合ですが、普段は三試合ぐらいあるので、夏の炎天下では体力勝負です。

次は、皆さんの記憶にあるでしょうが今年の都道府県対抗全国女子駅伝です。

雪がずっと降っていて、大会があるのかどうかかわらない中で準備しました。戸外のスポーツであり、シャッターチャンスを見逃さず撮らないといけないということで、京都新聞社が共催になっていました。

具体的に私が撮ったのが紙面のこの写真です。雪がふぶいてテレビ中継でも顔が見えないくらいなのからです。

また冬のスポーツ取材には、高校や大学のサッカーやラグビーがあります。

これは同志社大学の七人制の日本代表の選手ですがトライした瞬間のものです。

次は龍谷大平安高校が選抜で優勝した時ののですが、野球の取材には、一塁、三塁、センターの後ろ、ホームに帰って来た時に撮れる位置、と大体四人から五人位のカメラマンでチームを組んでいきます。そういうメンバーでその試合の決定的瞬間、場面をねらいます。

この写真は、私が三本間で撮っていた時の、ピッチャーが代わってピンチを救った場面、運動面でしたが結構大きく使っていました。

京の歳時記

京都ならではの三大祭りがありますが、自分たちの一年というのは、女子駅伝が始まって、選抜があつて、選抜が終わったら葵祭があつて、その次は祇園祭、祇園祭の時には高校野球の予選が始まるというような一年の流れがあつて、写真記者というのは基本的にそういう流れを取材するということです。都踊りとか五花街の年間の行事も追いかけます。これは秋の紅葉のライトアップの写真です。

事件・事故の報道

報道カメラマンとしては、京都や滋賀の事件や事故の現場に行き取材するわけですが、入社して以来、阪神淡路大震災のような大きな現場には幸いというか遭遇していないのですが、火事というのが結構あります。

十日に一回、宿直勤務というのがありローテーションでまわっていますが、泊っている時に何かあれば現場に出動し、すぐにパソコンから送信するという慌ただしい作業をしないと翌日の紙面に間に合わないということがあります。この白沙村荘茶室の火事の時、午前十一時十五分に撮影しています。時間的にはぎりぎり間に合いました。

入社直後のことですが、台風二十三号で川が氾濫しバスの上で人が救助を待って一夜を明かしたというニュースを覚えてられるでしょう。

夜に現場に向かったのが救助場面には間に合わなかったのですが、こうして家族総出で水に浸かった畳を運び出しておられる場面を取材させてもらいました。

これも入社すぐの鳥インフルエーザの取材、これは祇園の歩行者を巻き込んだ自動車事故です。全国紙との違いというのは、全国紙は全国で起きたことを取材し、オリンピックに行ったり紛争地に行ったりということがありますが、我々は京都や滋賀という限られた地域に根ざし、追いかけてゆくという取材をしています。

記者になったきっかけ

新聞社に入ることになったきっかけですが、旅というものがあります。大学の二回生が終った時に一年間休学しました。

アルバイトでお金を百万円ためて旅行にできました。このユーラシア大陸の地図に赤い線で書いてあるルートが自分が行ったルートです。

まず船で中国、上海に渡り、そ

こから東南アジアをめぐる、インド、パキスタン、旧ユーゴスラビア、ドイツ、ポーランド、ロシア、シベリア鉄道とめぐりました。(各地での子どもたちのいきいきとした笑顔、働く子どもたちの姿、カルチャーショックを受けたインドの貧しさ、当時軍事政権のパキスタン北部のフンザという一風の谷のナウシカ)のモデルとなったという大変きれいな場所、ベオグ

ラドの空爆のあと、アウシュビッツのあとなどの社会の負の歴史、モスクワからウラジオストクへの一週間の乗りつ放し、とその旅行で撮影された色々な場所での写真の紹介が続く

旅行が終ってから大学三年生になった時、同級生が就職活動を始めの中で、何かちょっと違うなという思いがあり、日本のことをもっと知りたいなと沖縄を訪ねた

りました。そして、今まで見聞きしたことを友達に喋った時に、新聞記者になったらどうだと言われました。

そこで初めてマスクミ、面白そうだなという思いが自分の中に芽生えました。当時自分は新聞など余り読んでなかったのですが、そこから全国紙を読んだり、新聞社への就職をめざしての勉強を始め、何とか今の新聞社へ入りました。

……このあたりから、新聞記者として働き始めてからの現在に至るまでの活動、その間のテーマを持った取材、「カメラは見た」シリーズで取りあげてきたこと、夜間中学校とは、自然、環境の保護につなぐ豊饒の森、芦生や東山の自然の連載、現在連載中の丹波高原の四季、と話は尽きません。最後に盛大な拍手が送られ講演を終えられました。

春の日帰り研修

平成二十八年四月三日(日)

桜咲く、春の美濃・尾張をゆく旅

岐阜歴史博物館 正法寺、犬山城、文化資料館、からくり展示館、長良川温泉



春の研修旅行は例年宿泊を伴う形態で実施してきましたが、平成二十八年春は趣向を変えて岐阜から犬山へと美濃、尾張地方を日帰りで巡る旅を実施しました。

日中は曇りで夜には雨という予報の中、午前八時にバスは京都駅八条口アバンティ前を出発、薄日の射すなかを名神京都東ICに向かいます。

車窓から見える京都市内の景色も桜花一色であり、高速道路沿いやトイレ休憩に立ち寄った多賀SAでも満開の桜を堪能しました。

バスは一宮JCTから東海北陸道に入り岐阜各務原ICを出て岐

阜城を眺めながら、岐阜公園に到着、下車して最初の見学地である岐阜市歴史博物館に向かいます。

岐阜というと斎藤道三、織田信長などが頭に浮かびますが、この博物館の常設展示は原始の人類が美濃平野に第一歩を踏みだしてから現在に至るまでの美濃平野の文化と歴史を眼で見て学ぶ場です。

展示物も多くそれぞれのコーナーにボランティアの説明員がおり、大変熱心に説明されました。岐阜という地の歴史についての認識を大いに改めた後、近くにある正法寺まで歩きます。

正法寺の本尊は釈迦如来で日本

最大の乾漆仏であり、日本三大仏のひとつで岐阜大仏とも呼ばれています。仏像は坐像で高さ十三・七m、耳の長さは二・一m、鼻の高さ〇・四mもあります。

やさしい表情と荘厳さに満ち、その静寂な空間に癒されました。

そのあとは、桜の名所でもある長良川堤に面した長良川温泉のホテルパークで会席料理の昼食です。

美味しくゆつくりと頂き歓談するうちに、温泉入浴の予定が時間がなくなり、温泉をあきらめて長良川を後に国道二十一号線を犬山城へ向けて走ります。

犬山城に近付くと、木曾川沿い

の桜もまた満開で人や車がたくさん出て周辺が大変賑わっており、なんと年に一度の「犬山祭」の真最中でした。

毎年四月の第一土・日に実施され、高さ八メートルもある三層の車山(やま)が十三輛、犬山城前広場と城下町を運行するお祭りです。その人出で広場は大変混雑しており、全員で一緒の行動は不可能と判断し、集合場所と時間を設定する自由行動としました。

目の前の勇壮な車山のからくり人形の動きに目を奪われながら、多くの人は国宝「犬山城」の見学は時間がかかり過ぎるのではとあきらめ、車山の運行の様子を見物したり、犬山の歴史や文化を展示紹介している犬山市文化史料館とからくり人形をテーマとしたからくり展示館を見学しました。

城下町の歴史と文化遺産を学び、精妙なからくり人形の動きに目を瞠りという時間を過ごし、犬山城を後にしました。

バスは高速道路を途中の多賀SAで休憩し、京都東ICで降り、京都駅八条口全員無事に到着しました。



秋の日帰り一日研修

平成二十八年十一月八日(火)

和歌山県九度山の真田昌幸、
信繁(幸村)の屋敷跡(真田庵)を訪ねて

平成二十八年秋の一日研修は、和歌山県伊都郡九度山の真田昌幸、信繁(幸村)の屋敷跡を訪れました。

曇り空で午後から雨という予報の中でしたが、ちょうどNHKの大河ドラマ「真田丸」が放映されている時期でもあり屋敷跡の真田庵では雨の中たくさんの人たちが観光でみえていました。

さて、朝八時半バスは京都駅八条口アバンティ前を出発しました。車窓に時折、小雨がぱらつくという天候でしたが、近畿道の岸和田SAのトイレ休憩の頃から本降りとなってきました。しかし高速道路は大きな渋滞もなく、十時半ごろに京奈和自動車道の高野口ICを出て目指す屋敷跡、真田庵の善名称院に向かいます。

一帯は柿の名産地でもあり、美味しそうな大きな柿が大変安く道の駅はじめ各所で売られており、参加者の多くがお土産として柿を求めました。

善名称院は、真田昌幸・幸村父子が蟄居した庵跡に立つ高野山真言宗の寺院で、通称「真田庵」とも呼ばれています。境内には、こ

こで亡くなった昌幸の墓があり、昌幸・幸村のゆかりの品や資料が公開されている真田宝物資料館があります。

私たちは、善名称院の本堂に上らせていただき、ご住職から三十分にあたり、真田庵の由来、昌幸・幸村の十四年間の地元で伝わる蟄居生活の様子をユーモアをいっばい交えてお話いただきました。

その後、宝物館に案内していただき、幸村が愛用したとされる槍先や鎧、武器や書状を丁寧に説明していただきました。

境内は雨が本降りでしたが、傘をさした見学者が多く、大河ドラマの人気を彷彿とさせました。昌幸の墓や境内の瓦や門、至る所に見られる真田の六文銭の旗印などをみながら真田庵を後にしてバスに戻りました。

高野口ICから阪和道の有田ICへと走り、有田川温泉の鮎茶屋へバスは到着、早速に昼食会場に向かいました。

九月までは鮎が人気のようですが十一月でしたので太刀魚が中心のミニ会席を美味しくいただきました。希望者は温泉に入浴しました。泉質も天然温泉であり肌触りが良く、すべすべ感があり、湯あがり後もずっとほかほか感がつづきました。



そして有田川温泉を出発し、帰途に着く前に和歌山マリーナシティ「黒潮市場」に立ち寄り、海産物を中心とした買物を楽しみました。

帰路もずっと雨の中でしたが、阪和自動車道、近畿自動車道、第二京阪道とたどり京都駅アバンティ前へ皆元気に戻ってきました。

参加者からは、「真田庵の住職さんのお話が面白かった」「二行程がゆっくりとしていたので天気はもう一つだったが、十分に目的地の見学ができ、買い物も楽しめた」「温泉のお湯が良かった」などの声がありました。

会員の窓

会員の皆様の協会の活動への目由な感想や提案、教育や生涯学習についての意見交流の場になればと「会員の窓」コーナーを設けています。今回は、元京都市立中学校長の野里基次会員に投稿をお願いしました。どうぞ、事務局あてに様々な声を今後お寄せいただければ幸いです。

「現代教育研究協会」へのお誘い

元京都市立月輪中学校校長

野里 基次

退職という時を迎えた時、これまでに感じたことのない思いがこみ上げてきました。

接してくださった皆様方への報恩感謝、無事に勤められたという安心感、ホッとした心。そして、第二の人生のスタート、生まれて初めての転職！いろいろな道を考えましたが、やはり教育を続けたい思いがこみ上げてきて奈良の私学の高校に決めました。

しかし、新たな不安がありました。十九年ぶりの理科の授業。昔はミリバール、今はヘクトパスカルの時代であり、知識が古いのでは。もっと自分自身が新たなものを学び、成長しなければならぬ。自分が成長した分だけ生徒たちも成長させられるし、信頼感が生まれると感じていました。そんな時、

梶村会長から「現代教育研究協会」のお誘いをいただき、これだ！と思いました。自分に欠けている新たな知識、力、教養を「インプット」したいと思い毎回参加させて頂くようになりました。学んだことを早速授業で伝えていきます。生徒たちも感動してくれています。私が感動した心がそのまま伝わっているのだと思います。

「現代教育研究会」で、少人数で畳の部屋でゆったりと、素晴らしい講演を聞ける時間は、私にとって至福の時間です。また、今の日常の舞台は奈良であり、接する先生方も奈良、京都、大阪、神戸の新たな人々です。懐かしい先輩や仲間と「現代教育研究協会」でお話しできることもうれしい時間です。

生徒たちの未来のため、幸せのために、この会の豊かな取組に期待し、一員であることを誇りに思っています。多くの皆様のご参加をお待ちしています。

編集後記

協会の事務所、講演会場が森清史顧問のご厚意で旅館「銀閣」へ移転し三年たちました。本年度も会員の皆様からの希望アンケートも参考にした諸事業を展開してまいりました。

コラム「会員の窓」も二年目を迎えます。協会の今後より一層の発展に向け皆様のご意見、ご要望をお待ちしています。